日本の寺院建築史および神社建築史の導入授業のあり方に関する一考察

飯　野　秋　成[*1]

1. はじめに

既稿[1)]でも述べたとおり、近年の一級建築士試験の学科Ⅰ（計画分野）では、建築作品に関する出題数が増加している。その背景には、建築物を単なる工業製品としてみられがちな風潮の現代において、世界の建築文化の脈々たる伝統を見据えながら、我が国に展開されるべき近未来の建築物のあり方の再構築を、これから活躍する建築士らに要求したいという意図が見える。

とはいえ、建築の勉強を一生懸命に行っている大学生や資格予備校の受講生らは、その多くが高校時代に「理系」に分類され、世界史や日本史の勉強にさほどのリソースを割いていない。つまり、資格試験対策として「建築史」を集中的に勉強する場こそが、過去の建築文化とじっくり向き合わせられる事実上の最終ステージとなっている。

「建築史」の大学の授業や建築史の資格試験では、個々の建築物の特徴をどれだけ記憶できたか、が勝負になるため、講義する側として「覚えておけよ」で終わらせてしまえばラクではある。しかし、建築文化に思いを馳せさせるという観点からは、講義の中に世界の（建築以外を含めた）文化史、さらには政治史や経済史の情報を要所に絡めながらメタ認知的に解説すべき部分もあるように思う。講義を提供する側にこそ、建築文化の周辺についても研鑽を重ね、周到な準備の上に立った「大排気量で余裕のある講義」が求められるのではないか。

以上の視点から、筆者が大学や建築系予備校で試行している建築史のレクチャ方法に関する論考を、前号に掲載していただいた。本稿ではこれに続き、我が国の寺院建築史および神社建築史に焦点を当て、建築士試験に頻出の作品を題材としながら、筆者のレクチャで工夫しているポイントをいくつか紹介してみたいと思う。

2. 日本の文化史を対外関係から理解する

2-1　西洋様式史および中国史との関係を図化する

西洋の様式史は、頭文字法により**「ギロ／ショビイロゴ／ルバコロゲン」**と表現できる[1)]。これを最初に覚えてしまって、我が国の建築様式の流れをつかむためのスケールとして活用してみたい。

図１の上段から中段に示すように、２つずつに区切ると、西暦４桁を用いずに、日本の「政治史」にほぼ対応させることができる。ややおおざっぱでは、と思われるかもしれないが、日本の政治史の順序さえおぼつかない受講生が多いとするならば、これを書けるようになるだけでも大変な進歩だろう。さらに、古典的かつ断片的な知識として、「なんと（710）みごとな…」「鳴くよ（794）ウグイス…」「いい国（1192）つくろう…」[注1)]などが出てくる学生がいるなら、数か所書き込むだけでもなかなか立派な年表ができあがる。

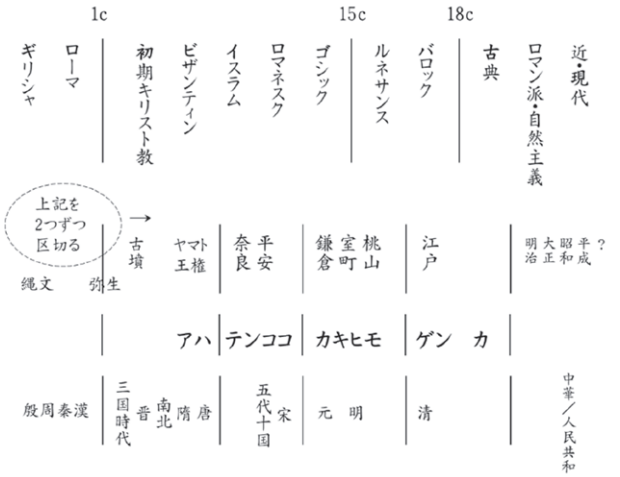

図１　西洋・日本・中国の文化史・政治史の相互関連に関する板書の例

建築士試験に出題されるかどうか、という視点ではやや余計な情報といえるかもしれないが、文化史に関する教養を高めるという観点から意味があると考える「中国史」にも少し触れておく。

「殷周秦漢三晋す／南北隋唐五宋元／明清中華で人民共和」（いんしゅうしんかんさんしんす／なんぼくずいとうごそうげん／みんしんちゅうかでじんみんきょうわ）は、高校「世界史B」の受験参考書にも出ている中国政治史の覚え方の１つ。余裕があるときに紹介するネタだが、図１下段のように書き加えれば、遣隋使・遣唐使、日宋貿易、元寇、日明貿易、そして日清戦争など、おそらく受講生らも聞いたことがあるであろう断片的な知識が「流れ」として可視化される。我が国の寺院建築や神社建築が、大陸からいつどのような文化的影響を受けているのかを洞察する上でも、いくつもの重要な示唆があると思う。

2-2　各時代の寺院建築の特徴に踏み込む

図１に、日本文化史のフレームを書き加えてみる。奈良

*1　いいの　あきなる
新潟工科大学工学部工学科　教授
〒945-1195　新潟県柏崎市藤橋1719

時代以前の枠に飛鳥・白鳳文化、奈良時代には天平文化、とやっていくが、これらは頭文字法で**「アハ／テンココ／カキヒモ／ゲンカ」**のように整理するのが早い[注2)]。そしてもちろん、個々の文化の特徴についても、初回レクチャの時点いくつか拾っておくことは大切である。

①古代の寺院建築の概観

「ア」（飛鳥文化）は、推古天皇のもとで蘇我氏や聖徳太子が活躍した時期にあたり、仏教伝来を受けて、豪族らの権威の象徴はそれまでの古墳から氏寺（うじでら）に移行する。「ハ」（白鳳文化）と「テン」（天平文化）では、それぞれ初唐および盛唐文化の吸収時期とも重なり、仏教はヤマト政権のもと官寺（かんじ）として保護され、壮大な寺院が作られるようになっていく。仁徳天皇陵も法隆寺も「権威の象徴」という同軸に位置付けられることは、なかなか刺激的な情報であると思う。加えて、仏陀の骨を砕いた舎利が寿司のシャリに通じていることや、舎利を収めた塔を仏像を収めた金堂が囲む、という**伽藍配置**が、徐々に金堂を中心に配置するように変化することなども、興味を引く材料になるだろう。

平安時代の「コ」（弘仁・貞観文化）は晩唐にあたり、天台宗、真言宗に代表される**浄土信仰**に基づく**密教**が貴族の間で全盛となる。「コ」（国風文化）では、遣唐使の廃止の影響により国内の文化が成熟していく。平等院鳳凰堂（1053）に収められている来迎図（らいごうず）が浄土へいざなう菩薩の姿を描いたものであることや、曼荼羅（まんだら）が密教の世界観を描いたものであることなども、話題性があるだろう。さらに、如来、菩薩、明王、天部の違いや見分け方などは、建築史の授業としてはやや脱線気味にはなるものの、受講者の興味喚起のための定番ストーリーではある[注3)]。

②中世～近世の寺院建築の概観

平安末期となると、武士の台頭する不安定な世に移行する。武士や庶民は、苦行を求める密教的宗派に魅力を感じず、「選択（せんじゃく）／専修（せんじゅう）／易行（いぎょう）」が特徴の**鎌倉新仏教**に拠りどころを求めるのは必然の流れと映る[注4)]。

「カ」（鎌倉文化）では武士や庶民に新たな宗教文化が栄える。その後「キ」（北山文化）では**禅宗**が武士の精神基盤として受け入れられ、さらに「ヒ」（東山文化）ではより洗練された禅宗感が示されるといわれる。

やがて応仁の乱（1467-1477）を経て、戦国の世の「モ」（桃山文化）の時期には、城郭建築の建設ノウハウも蓄積されていく。江戸時代に入って社会がある程度安定してくると、江戸時代初期の「ゲン」（元禄文化）が主に上方に花開く。派手でイキな文化といわれる。対照的に、江戸時代後期の「カ」（化政文化）は江戸中心で、やや地味で退廃的といわれる。江戸時代の初期に建立された日光東照宮（後述）以降、建築文化の観点から目立った建築物は築造されていないため、江戸時代中期以降の建築物が授業で取り上げられることはあまりないが、例えば、桃山～元禄文化期あたりから綿々と続く人形浄瑠璃の文化が現代に「初音ミク」として蘇る、という論考の紹介など[2)]、「みなし」「みたて」の側面が強く語られる日本芸術論の観点から話題提供することは、初学者には非常に興味深く映る。

3. 中世の禅宗の「体系」に踏み込む

3-1　出題傾向の概観

寺院建築に関する建築士試験対策の柱は、鎌倉前期の**大仏様**と、鎌倉後期～室町時代の**禅宗様**を区別することにある。大仏様は、名前の通り大仏を収容できるほどの大架構の寺院建築様式で、長距離の柱間をとおす虹梁（こうりょう）や、柱との取り合い部分の工法ディテールである挿肘木（さしひじき）などがキーワード。浄土寺浄土堂（1194）や東大寺南大門（1199）などがよく出題される。一方の禅宗様は、比較的小ぶりな寺院の随所に緻密な細工が施されており、詰組（つめぐみ）、火灯窓（＝花頭窓、かとうまど）、海老虹梁（えびこうりょう）などがキーワード。わが国の職人らの手先の器用さを象徴するような寺院建築様式で、円覚寺舎利殿（15c前半）の出題が比較的多い。

また、頻度は少ないながら、古代の寺院に関する出題がなされることもある。法隆寺の伝法堂の桁行が7間、とか、薬師寺東塔（730）には裳階（もこし）がある、などのディテールに関する記述の正誤判断が中心である。このあたりの古代史にまで手が回るほどの余裕はないのが普通だから、過去問に出た記述をまあひとまずさらっておこうか、という断片的な対策ぐらいにならざるを得ないところか。

3-2　なぜ2つの寺院様式が生まれたか

より受講生に興味を持ってもらうための工夫として、仏教の伝来以降、貴族、武士、そして庶民に仏教が根付いていく過程を、ざっくりと概観させておくのも悪くない。

仏教で大切とされるのは、本来的には「戒律」、「修行」、そして「智慧」である[3)]。我が国に伝わった北伝仏教は「修行」にやや重きが置かれる。古代中国において、言葉や生活習慣が全く異なる多くの民族や国々が興亡する中で、人々をまとめ上げるためのイデオロギーの側面から仏教の利用価値が模索され、結果として言葉に多くを頼らない「修行」に力点が置かれるようになった、という考え方は納得しやすいだろう。6世紀に我が国に伝わった仏教も、密教の厳しい修行を中心とする宗派であって、修行に身を投じるだけの余裕のあった貴族を中心に広まったのも、自然な流れと感じる。

その後、中国では五代十国時代を経て「宋」が中国をまとめ上げる。都市の中に大きな修行の場をつくり、文化的枠組みを超えて多くの人々を集めて如来像を拝ませようとする仏教信仰のあり方は、やがて寺院建築に必然の大空間である**大仏様**を生み出す。院政期にあたる同時期の日本に、日宋貿易を通じて徐々に伝わり、鎌倉前期

の寺院建築の様式として盛んに用いられる[注5)]。

さらに後の「北宋」の時代には、単なる瞑想的な修行のみならず、「戒律」や「智慧」も含めた本来の仏教のあり方を模索する宗派も生まれる。経典の問いに真摯に向き合い、やがては僧侶との問答に重点を置いた修行スタイルを持つ「禅宗」である。問答を行うならば、騒がしい都市内の大空間よりも山林の静かな場にシンボリックな寺院を求めることも必然であろう。このような説明は、**禅宗様**の寺院の小ぶりなスケールに、そして我が国での独特の凝ったデザインの発達に、受講生が意味を見出すきっかけにもなる。

3－3　なぜ出題される禅宗様の建築物は絞られるのか

鎌倉新仏教のキーワードである「念仏」は、戒律を暗唱する本来の仏教帰依のあり方とはややずれるが、過酷な日々を生き抜かなければならなかった中世武士や農民には、密教的な修行には限界もあるから、念仏が拠り所となる経緯は理解できる。当時の新仏教宗派の多くは、旧仏教と同様に浄土信仰の考え方が根強く、浄土宗（中心寺院は知恩院）、浄土真宗（同 本願寺）、時宗（同 清浄光寺）、臨済宗（同 建仁寺）、曹洞宗（同 永平寺）の考え方の基盤となった。武士は禅宗、すなわち臨済宗と曹洞宗に、農民は浄土真宗（一向宗）などに傾くが、京の商人などは応仁の乱による京の混乱期を経て、現世の利益を優先させる考え方の日蓮宗（法華宗，中心寺院は久遠寺）に傾倒する。

さて、現存する禅宗様の寺院としては、図２上段に挙げた９つが有名で、Wikipediaにもリストが掲載されている。この中で出題が２つほどに絞られるのはなぜか。その答えは、室町幕府第３代将軍足利義満による**五山十刹の制**（ござんじっさつのせい）を紐解くことで見えてくる。

幕府の庇護を受ける禅宗寺院群（叢林;そうりん）と、そうでない禅宗寺院群（林下；りんか）に分類し体系づけたものである。叢林には、南禅寺を別格として「京都五山」および「鎌倉五山」があり、それぞれに臨済宗の大寺院が位置付けられている。一方の林下には、幕府からの直接の庇護を必要とせず自由な宗教活動を積極的に求めた寺院群が並ぶ。これらは全て、高校「日本史B」でも暗記が求められているものでもあるが[4)]、建築士試験に出題頻度の高い２つは「鎌倉五山」に属する寺院であることに気付く。それ以外の現存する禅宗様の寺院は、時代により宗派を変更した形跡があったり、火災による焼失と再建の形跡があったり、あるいは（林下独特の）個性的な特徴があったりと、国家試験に出題する禅宗様の「代表」としてはなかなか扱いにくい、というの、出題者側の素直な気持ちだろう。

実際のところ、建築史の講義の中で五山十刹の制にまで踏み込むことは稀であるし、受講生らがこれらを完全に記憶しきる余裕もないだろうが、禅宗に寺院体系があることを知る機会を少し提供するだけでも、断片的な暗記作業に追われていた受講生らを一歩、メタ認知モードに近づけられるとすれば有益と思う。

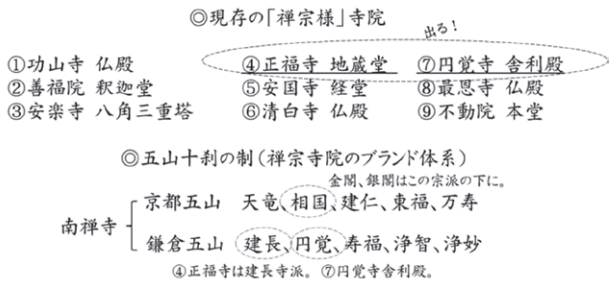

図２　２つの「禅宗様」寺院の出題理由に関する板書の例[注6)]

なお、我が国の仏教寺院群が壊滅的な被害を受けたイベントを３つ挙げるなら、**南都焼討（1181）**、**応仁の乱（1467-1477）**、そして明治維新直後の**廃仏毀釈**である。全国規模で徹底的に廃仏毀釈が行なわれたことを知る受講生は少ないが、我が国から大量の仏教文化財が消失してしまったという事実の紹介は、受講生等にとってもショッキングで、思わず授業中にため息が漏れる情報である。

4. 神社建築の７つの様式を概観する

建築士試験に出題されやすい７つの神社建築を取り上げてみる。

古墳時代に建立されたといわれる次の３つを記憶するところからスタートさせる。伊勢神宮は**神明造**（しんめいづくり）、出雲大社は**大社造**、住吉大社は**住吉造**。「～造」は、ネーミングされた当該建築物にみられるさまざまな特徴を包括した表現である。諸説ある部分も含めて１つ１つの要素をパーフェクトに押さえることには難儀するが、建築士試験に出題されるのは、建物の客観的な特徴などの確実な情報のみである。結果的に、神社の名称と「～造」との対応関係、そして、棟と平行な面から建物に入る「平入」（ひらいり）なのか、あるいは棟に直交する面から建物に入る「妻入」（つまいり）なのか、が出題されることが多い[注7)]。

３つの神社の創建の順序は明確ではないが、仮に、伊勢→出雲→住吉、の順として図３の神社の概形を比較すれば、出雲大社では参拝者の入口に屋根がつくようになっているし、住吉大社では妻面の真ん中から入れるようになっている。このような「参拝者への配慮」という視点から神社のつくりの改良が進むことの紹介は、理解と記憶のための助けになる。

この改良の流れは、続く奈良時代の創建とされる神社２つ、春日大社の**春日造**、そして賀茂別雷神社（かもわけいかづちじんじゃ）の**流造**（ながれづくり）につながる。「平入」の特徴を持つのは、上記の中では神明造と流造だけであるため、平入／妻入の入れ替え問題は容易に解答できる。

やや時代を下って、室町時代の北山文化に位置づけられる吉備津神社（1425）に注目すると、広い本殿の屋根

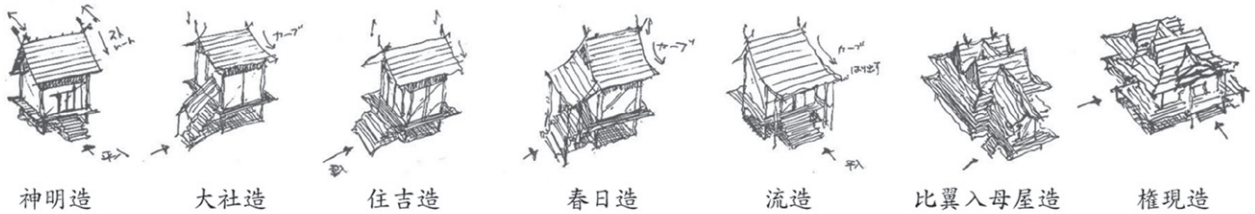

図３　　７つの神社建築様式のスケッチの例（著者による）

を入母屋の連続で覆い、ついに拝殿は室内化されている。これは**比翼入母屋造**（ひよくいりもやづくり）とよばれ、他の神社建築の意匠にはあまりみられない特徴だが、これも「参拝者への配慮」に基づく斬新な改良、と考えれば理解もつながる。江戸時代の寛永文化に位置づけられる日光東照宮（1636）の**権現造**（ごんげんづくり）も、この考え方の延長にあり、本殿よりもむしろ拝殿の方が大きくなり、より多くの人々が徳川権現を拝める。武士の世に安寧を求める多くの人々に寄り添うため、と補足するのもよい。

なお、図３の絵を受講生に描かせることも、建築物のスケッチ練習としてなかなかおもしろい。記憶すべき内容を７つの作りに絞って、授業１コマの間にじっくりとフリーハンドでゆがみなく描かせる時間を設けるのも良いと思う。設計製図の導入教育とも関連させながら、立体的な授業体系に昇華しうる可能性を感じる。

5. まとめ

「神は実は仏であった」とする本地垂迹説（ほんじすいじゃくせつ）などにみられる**神仏習合**の考え方は、実は白鵬文化期のころからあった。時代とともに神社と寺院は融合が進むが、神も仏もゴチャゴチャにするのはなんとも日本文化らしい、と感想を漏らす受講生もある。「垂迹」の言葉自体、実は中国の古書にも見られ、外来の考え方ではないかという議論もあるわけで[5)]、日本文化らしい、というステレオタイプな考え方は受講生自身の文化感を自ら狭く既定してしまっていることになりはしないか。「～様」「～造」の暗記作業にとどまらず、そのようなことを今一度考えさせる機会としながら、少し高い位置から文化を俯瞰させる意義は大いにあるだろう。建築史のレクチャの時間をより豊かなものにするための工夫の余地はまだまだあるものと思う。その可能性の追求を今後もぜひ続けていきたいと考えている。

参　考　文　献

1）飯野秋成；西洋建築史および都市計画史の導入授業のあり方に関する一考察，新潟の生活文化，No.24，pp.22-25，2018.3

2）「美術手帖 －初音ミク 日本文化の鏡像か？それとも世界の未来か？」，2013年 6月号，美術出版社（2013）

3）末木文美士；「仏教の歴史２－東アジア」，山川出版社（2018）

4）石川晶康;「石川日本史Ｂ講義の実況中継⑤文化史」，語学春秋社（2002）

5）佐藤弘夫ほか;「概説 日本思想史」，ミネルヴァ書房（2016）

注

1）鎌倉時代の始まりには諸説あり、源頼朝が征夷大将軍に任命された1192年の他、守護・地頭職が設置された1185年とする考え方などもある。

2）図１に示さなかったが、江戸時代初期に見られた短期の「寛永文化」を加えると、いわゆる豪華絢爛な建築物は寛永文化まで、とも説明できる。その後大名統制が徹底され、また恒常的な幕府の財政問題などもあり、以降の江戸時代中に大規模建築物はあまり作られていない。

3）伽藍配置、あるいは各種仏像の見分け方などは高校「日本史B」で扱う話題でもある。

4）ただし、旧仏教が下火になったというわけではないことは、鎌倉時代初期に東大寺大仏殿の大規模な再建が行われていることなどからもわかる。

5）宋では、すでに初期の禅宗も浸透し始めていた。「文字禅」といわれる、経典などの問いに対し、答えを文字に起こしていく問答スタイルが既にあったとされる。

6）鹿苑寺金閣（1398）と慈照寺銀閣（15c後半）については、前者の１階が寝殿造、後者の１階が書院造、そしていずれも最上階が禅宗様であることがよく問われる。

7）10年ほど前の一級建築士試験において、伊勢神宮の「式年遷宮」に関する記述の正誤を問う出題がなされたこともある。